

アユ資源・漁獲の状況について

1. H28 年秋のアユ産卵量

- ・主要天然河川の産卵量は約 214 億粒で、平年の 2 倍と多かった。
- ・9 月下旬に産卵が集中しており、例年に比べて産卵ピークが遅かった。
- ・これは 9 月下旬まで少雨により、産卵河川の水量が少なく、水温も産卵適水温(23℃以下)より高かったため。

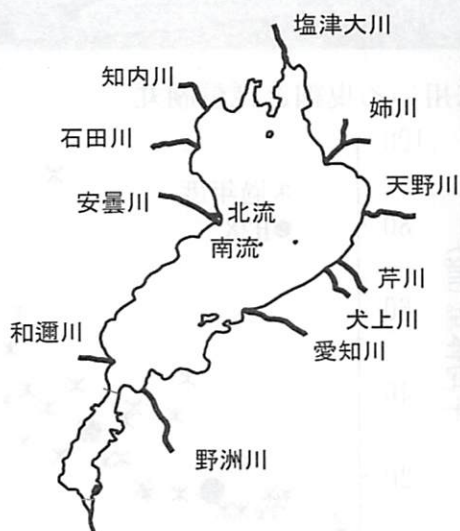


図 1 調査河川



写真 1 調査風景

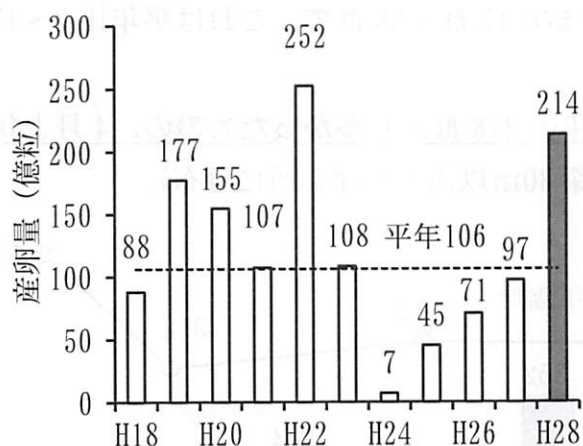


図 2 産卵量の推移

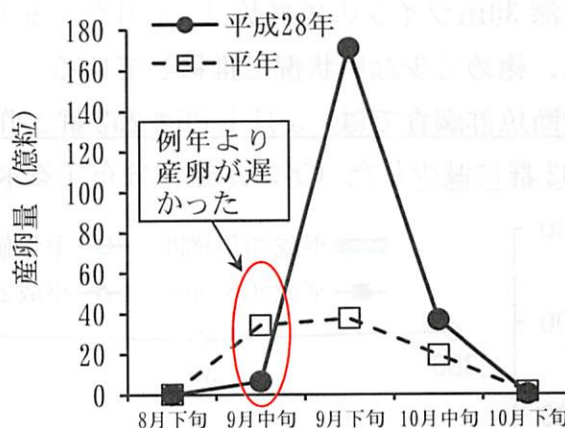


図 3 時期別の産卵量

2. アユ稚魚調査での採捕尾数

- ・ 10月の採捕尾数が平年より少なかったのは、産卵ピークが遅かったため。
- ・ 11月、12月は平年の2倍以上と多い状況。

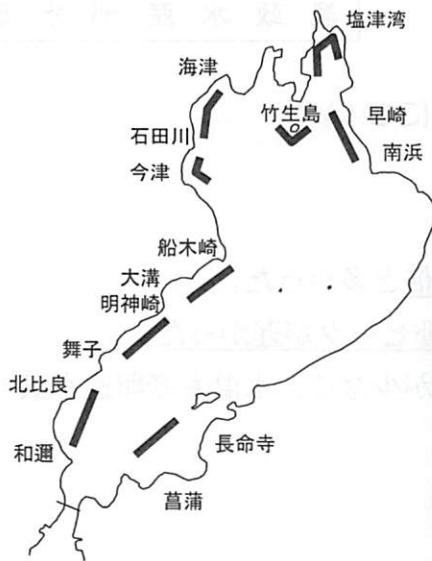


図4 調査水域(—)

写真2 調査に用いる曳網と琵琶湖丸

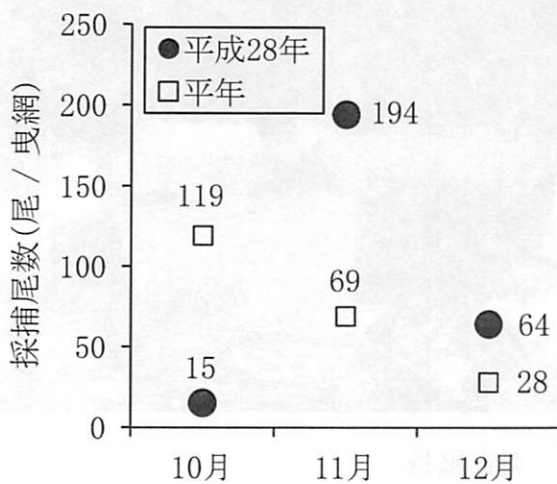


図5 採捕尾数の推移

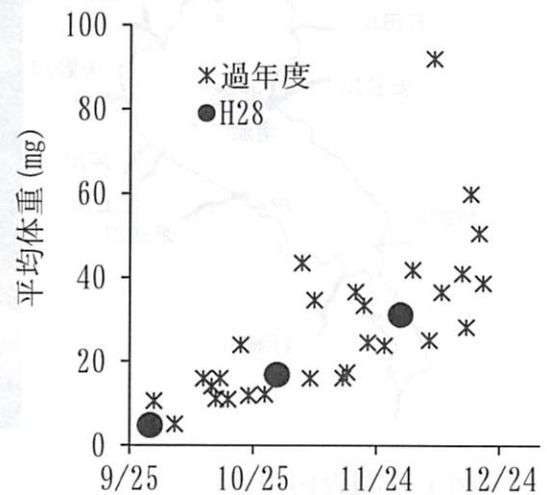


図6 調査日と平均体重の関係

3. アユの魚群数

- ・ 水深 30mラインの魚群数は、1月から5月まで 13 群～88 群で、これは平年比 2～17%と、極めて少ない状況で推移している。
- ・ 横断魚群調査では、3月上旬は 252 群と昨年の 218 群より多かったものの、4月上旬は 102 群に減少した（アユが通常分布する水深 30m以浅より深い所に分布）。

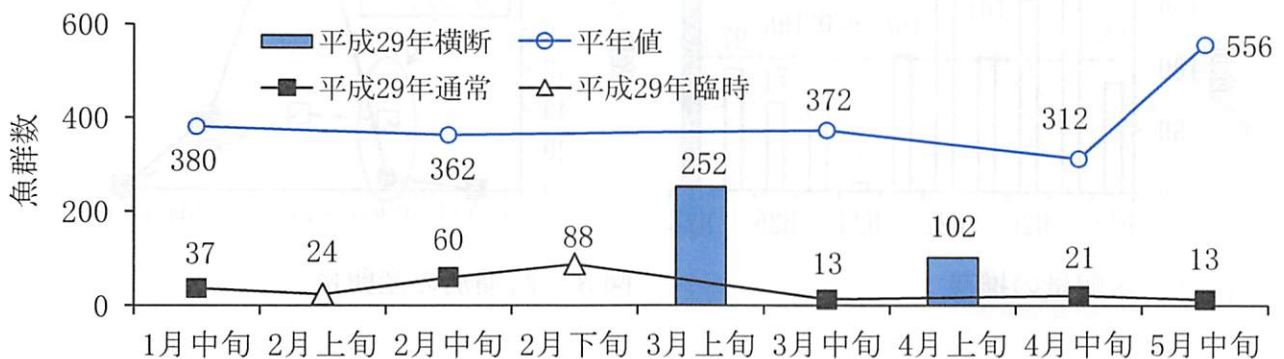
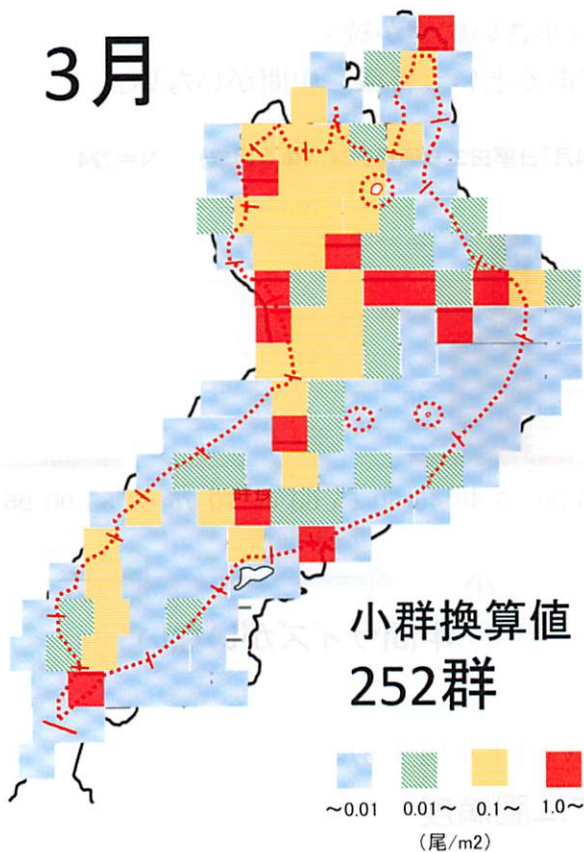
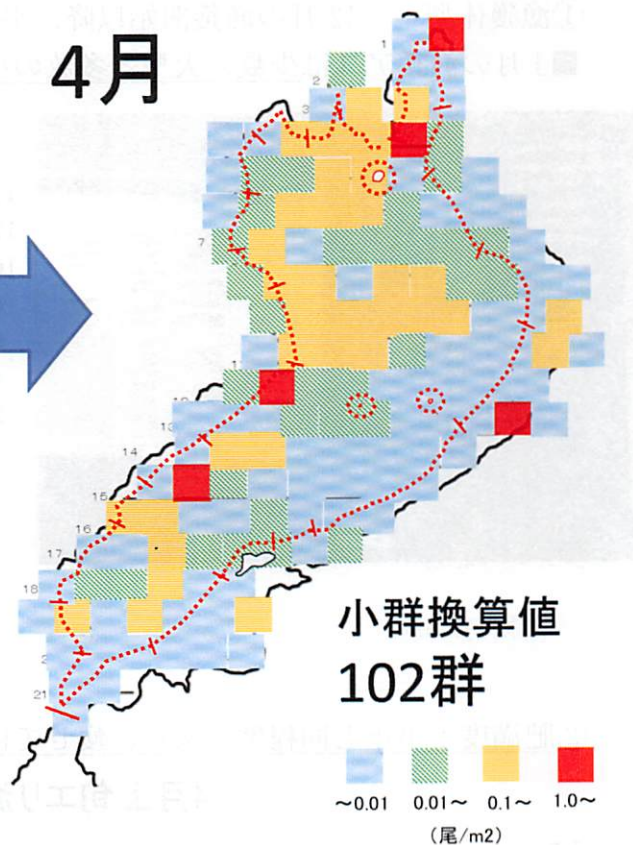


図7 魚群数の推移

3月

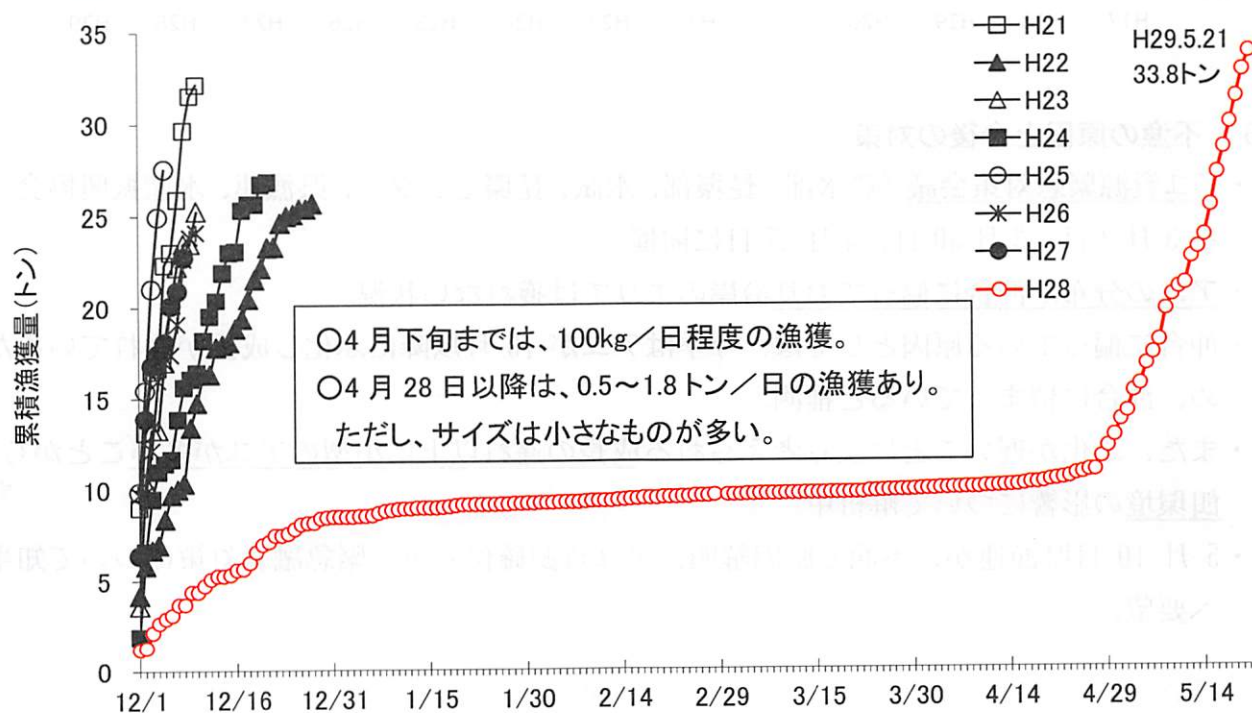


4月



4. 漁獲の状況

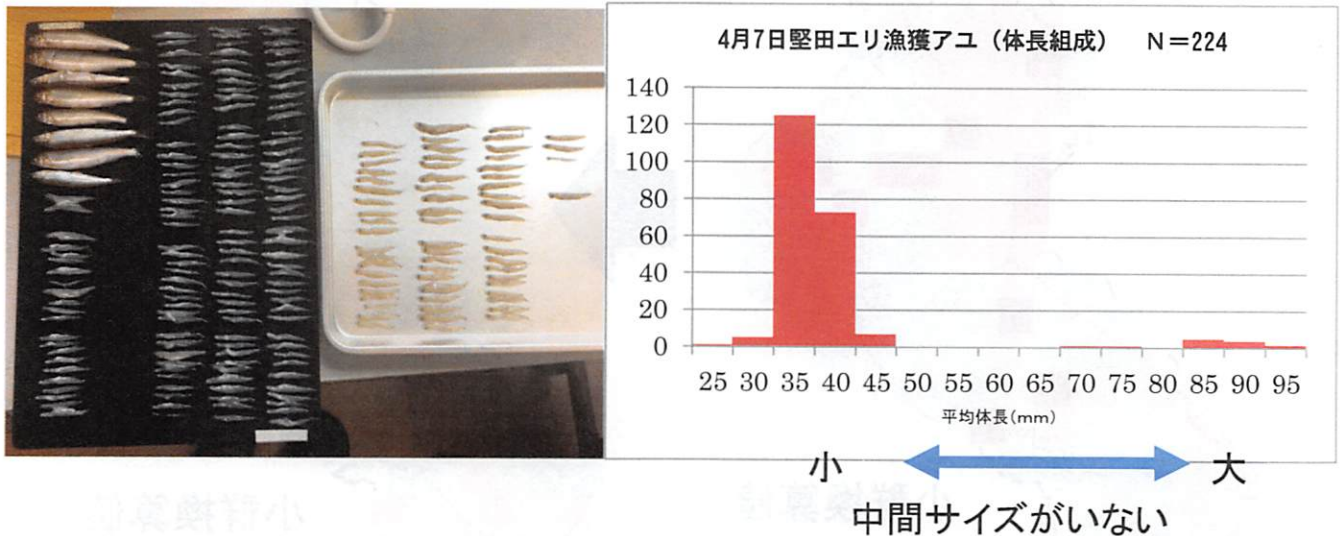
- ・昨年 12 月に始まったアユ漁は、極めて低調な漁獲状況で推移していたが、4 月下旬から漁獲が伸び始め、5 月 21 日現在の漁獲量は 33.8 トンとなっている（12 月 1 日から 5 月 21 日までの過去 5 ケ年の平均漁獲量の 49%）。



5. 成育状況

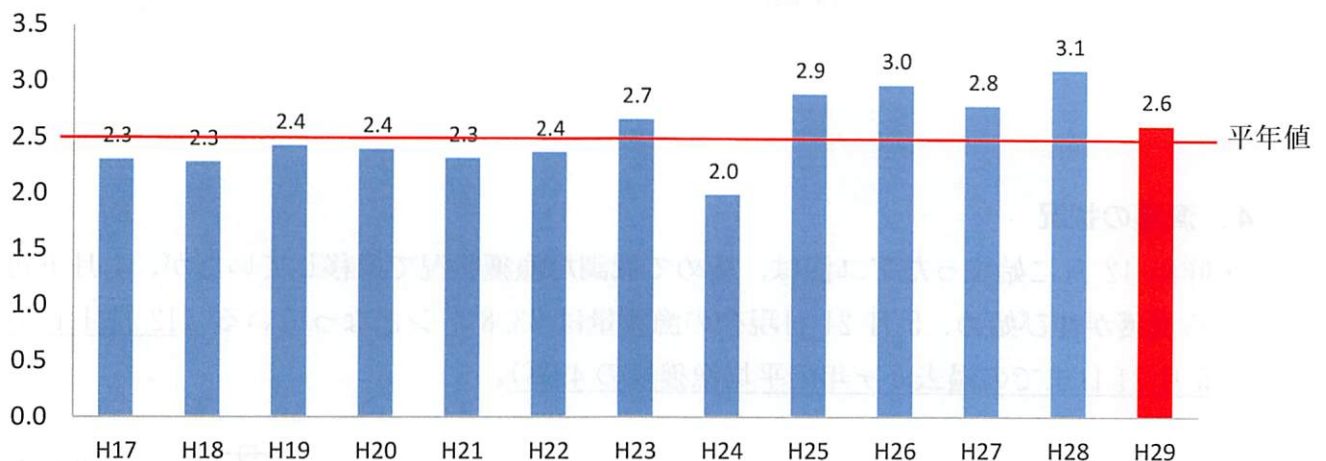
①漁獲体型 12月の漁獲開始以降、平年より小さい状態が続く。

■4月の漁獲アユは少数の大型と多数の小型であるという特徴。中間がない。



②肥満度：平年と同程度であり、痩せてはいない（平年値 2.5）。

4月上旬エリ漁獲アユ肥満度



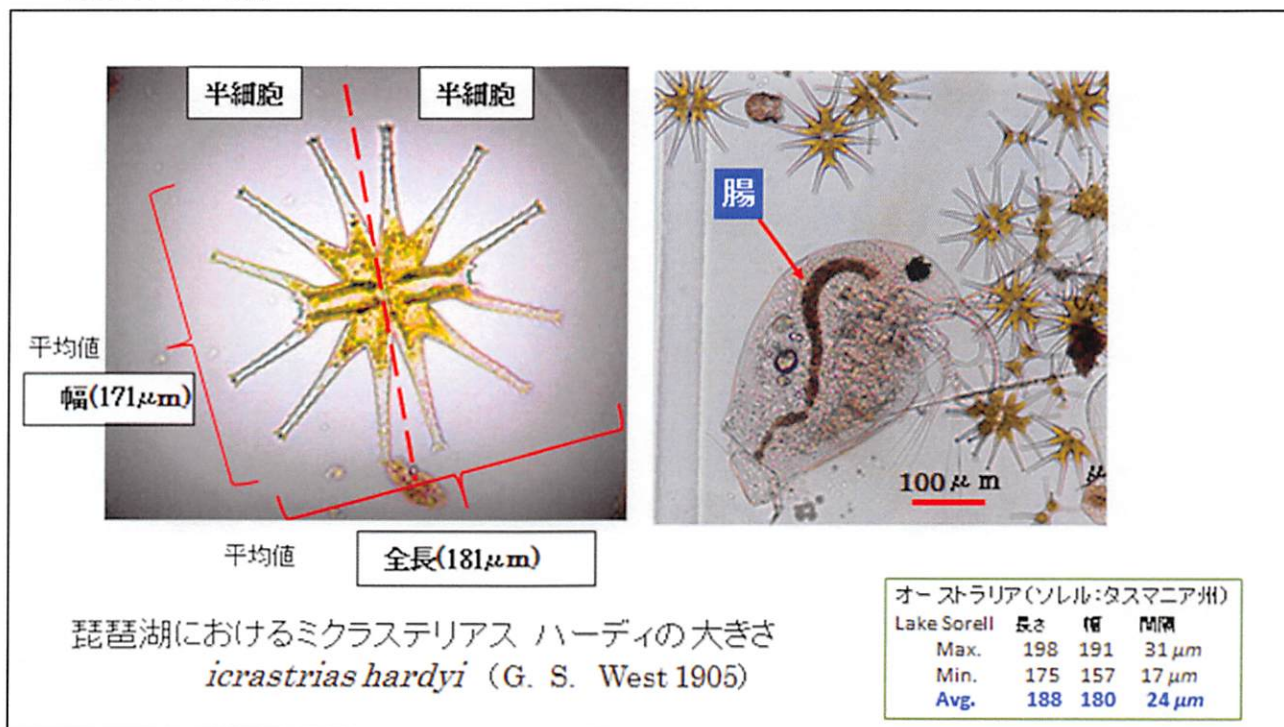
6. 不漁の原因と今後の対策

- ・アユ資源緊急対策会議（農水部、琵琶湖部、水試、琵琶湖センター、県漁連、水産振興協会）を3月2日、3月30日、4月27日に開催。
- ・アユの分布が沖合に偏っており沿岸のエリでは獲れない状況。
- ・沖合に偏っている原因としては、今季はアユが10月以降にふ化し成長が遅れているため、沖合に留まっていると推測。
- ・また、ふ化が遅いことにより考えられる成長の遅れ以上に小型のアユが多いことから、餌環境の影響について解析中。
- ・5月10日県漁連が、不漁の原因解明、アユ資源確保対策、緊急融資対策について知事へ要望。

7. 関連事項

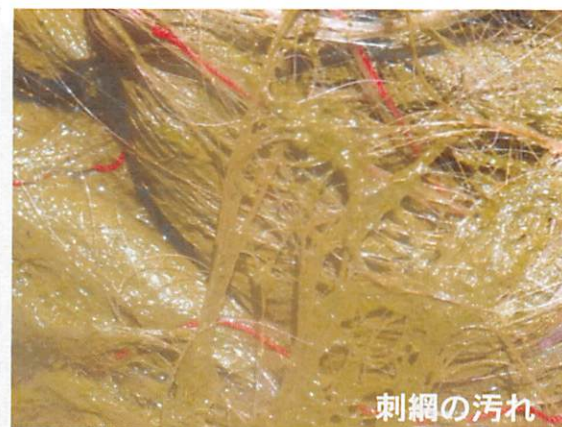
・ミクラステリアスの大増殖

- 外来の大型植物プランクトン（ミクラステリアス）が昨年秋から冬に大増殖したことで、アユの餌となる動物プランクトンに影響があったことが推察されるが、現在のところ不明。



・漁網の汚れ

- 今年は特に網の汚れが酷いとの指摘があり、エリでは「付着珪藻」、刺網では「緑藻（細長い種類）」が多く付着していることを確認。



- ・エリ網の汚れについては、琵琶湖の透明度上昇により付着珪藻が増殖しやすくなっていること、網地の付着珪藻を食む在来魚が減少していることが一つの原因と推測。
- ・水質と植物プランクトンの増殖などについて、さらに原因解明が必要。

■アユの餌環境や網の汚れなどの大きな課題について、水産試験場と琵琶湖環境科学研究中心、国立環境研究所が連携して、広い視野から原因解明と対策を検討していく。

- ・本件に関し、4月20日に庁内連絡会議を立ち上げ。
- ・環境政策課、琵琶湖政策課、水産課、琵琶湖センター、水試